慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ディルタイの「理解」概念がもつ形態学的特性について： 多様な意義のポリフォニックな把握としての理解
Sub Title	Uber den morphologischen Charakter von Diltheys Verstehen : Das Verstehen als die polyphonische Auffassung von dem verschiedenen Bedeutungen
Author	真壁, 宏幹(Makabe, Hiromoto)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1989
Jtitle	哲學 No.88 (1989. 6) ,p.165- 187
JaLC DOI	
Abstract	Die Hermeneutik Diltheys, welche ihren traditionellen Bereich der Anwendung ausgedehnt, und so versucht hat, die Geisteswissenschaften zu grunden, von denen jetzt verschiedene Standpunkte kritisiert werden. H. G. Gadamer, z. B., hat Diltheys Verstehen als romantisch psychologisches Versehen kritisiert. Aber ich glaube, dass das Verstehen Diltheys andere und reiche Moglichkeiten hat. Durch 1. den Vergleich zwischen der Methodik in der Naturforschung Goethes und den methodischen Bedingungen des Verstehen, und 2. durch die Analyse der Entstehung von Bedeutungszusammenhang im Prozess des Verstehens mochte ich in diesem Aufsatz den Einfluss der Morphologie Goethes auf das Verstehen zeigen. Dieses Verstehen wird als die polyphonische Auffassung von den verschiedenen Bedeutungen charakterisiert. Schliesslich soll darauf hingedeutet werden, dass das o. a. Problem in Beziehung zum dualistishen Muster von metonymischem und metaphorischem Denken steht, das im Strukturalismus (besonders in R. Jakobson und Levi-Strauss) auftaucht.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000088-0165

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ディルタイの「理解」概念がもつ形態学的特性について

—多様な意義のポリフォニックな把握としての理解—

真　壁　宏　幹*

Über den morphologischen Charakter von Diltheys Verstehen

——Das Verstehen als die polyphonische Auffassung von dem verschiedenen Bedeutungen——

Hiromoto Makabe

Die Hermeneutik Diltheys, welche ihren traditionellen Bereich der Anwendung ausgedehnt, und so versucht hat, die Geisteswissenschaften zu gründen, von denen jetzt verschiedene Standpunkte kritisiert werden. H. G. Gadamer, z. B., hat Diltheys Verstehen als romantisch psychologisches Versehen kritisiert.

Aber ich glaube, daß das Verstehen Diltheys andere und reiche Möglichkeiten hat. Durch 1. den Vergleich zwischen der Methodik in der Naturforschung Goethes und den methodischen Bedingungen des Verstehen, und 2. durch die Analyse der Entstehung von Bedeutungszusammenhang im Prozeß des Verstehens möchte ich in diesem Aufsatz den Einfluß der Morphologie Goethes auf das Verstehen zeigen. Dieses Verstehen wird als die polyphonische Auffassung von den verschiedenen Bedeutungen charakterisiert.

Schließlich soll darauf hingedeutet werden, daß das o. a. Problem in Beziehung zum dualistishen Muster von metonymischem und metaphorischem Denken steht, das im Strukturalismus (besonders in R. Jakobson und Lévi-Strauss) auftaucht.

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科博士課程（教育学）

1. はじめに

周知の如く，ディルタイの生涯通じて変らぬ関心は，歴史的社会的生を学的に把握する際の条件の吟味，すなわち「歴史的理性批判」にあった．1900年(『解釈学の成立』)以降，この問題意識を背景に特に理解の理論としての解釈学が重要性を増してくる．ディルタイは，それまでの伝統的解釈学（古典解釈学，聖書解釈学）の射程範囲を拡大したシュライエルマッハーを継承し，さらに，理解を人間存在の根本的在り方として位置づけ文献読解の単なる技術論ではない解釈学を展開することで，自然科学と区別される性格をもつはずの精神科学の認識論的・方法論的基礎づけを試みたのである．ディルタイ以降解釈学は現代哲学上枢要な問題となり，ハイデガー，ガーダマーらのもとでいわゆる「存在論的転換」を経験することで新たな展開を示すにいたったわけだが，しかし，それとともにディルタイ解釈学は様々な批判にさらされることにもなった．現存在の根本的動向としてより深く理解を捉えようとするこの「哲学的解釈学」によれば，ディルタイ解釈学はどちらかといえば認識論的であってラディカルでないとみなされている．さらに自然科学の方法意識に影響された客観主義に陥っており世界経験(たとえば芸術経験や作用史的意識として生じる歴史の経験)のもつ真理性を正しく把握していない，と評価されることにもなったのである．また，理解をエクリチュールモデルで考察しテキストの意味—出来事の弁証法的生産的過程を理解の本質とみるリクール解釈学の立場からは，理解を対話モデルで考え著者の意図の再現としがちなディルタイ解釈学は同一性の原理に基づくロマン主義的かつ心理主義的解釈学だと批判されてもいる．

こうした批判の幾つかは確かに正しい指摘を含んではいる．だが，なぜかこれらの批判はディルタイが理解をのべるときイメージしていた事柄・問題圏から微妙にズレていると感じざるをえないこともまた事実である．

そこで本論文ではディルタイの理解概念を伝統的個別解釈学→ロマン主義的一般解釈学→哲学的解釈学といったコンテクストから離れたところに位置づけることで，この「ズレ」を解消し，理解概念がもつ潜在的豊かさを示してみたい．具体的にいえば，ゲーテ自然学，とくに形態学にみられる方法論，認識論，自然観との関連で理解概念に光をあてたいのである．もちろんゲーテ形態学の対象は自然（植物，動物）であって（あとで詳述するように自然科学とは対立する自然認識をその特色にしているわけだが），ディルタイの理解の適用領域である人間的世界ではないが，ディルタイはこの形態学的発想を作用連関，構造連関が織り成す歴史的社会的世界に導入しようと試みたとも考えられるのである．

もちろん，中期思想に分類される記述心理学論稿や世界観学の類型論的発想にゲーテの影響をみるのは自明なことではある．たとえば，フリットヨフ・ローディは『形態学と解釈学』[(1)]のなかでこの問題を考察し，ディルタイ哲学にみられる二つの傾向，形態学的傾向と解釈学的傾向の移行過程を術語の変遷を丁寧に辿ることであとづけ，後期に移行するにしたがい解釈学的傾向の比重がましてくるにもかかわらず，形態学的傾向もやはり同時に存在し続けている（たとえば世界観学）ことを明らかにしている．その際，形態学的方法としての「比較法」がもつ恣意性や類型による歴史認識の閉鎖性などの点が批判され，異質なものの動的な把握を可能にする解釈学が積極的に肯定されている．（こうした点にかぎり，ディルタイの友人であるヨルク伯の批判，それを継承したハイデガーやガーダマーによるディルタイ批判と軌を一にしているといえるだろう）．しかしここで論じてみたいのは，こうした傾向と区別され対立的に述べられることの多い後期解釈学期の理解概念に含まれていると考えられる形態学的特性についてであり，ローディの研究では否定的にみなされている形態学的傾向がもつ潜在的豊かさについてである．

もちろん，こうした観点にたち，ディルタイ解釈学の形態学的側面を指

摘し，しかもそれを欠点とはみず逆に積極的に評価しようとする研究が今までなかったわけではない．たとえば高橋義人の『ディルタイ解釈学の形態学的視座』[(2)]などある．高橋はこの論文のなかでゲーテの Morphologische Schau，すなわち植物や動物の原型と多様なそのメタモルフォーゼをみぬく「知的直観」とディルタイの類型論的見方の親近性を詳細な比較をつうじて指摘し，更に興味深いことに解釈学的アポリアのひとつとしてディルタイがあげている全体から個へ，個から全体へというあの解釈学的循環の問題の解決可能性をこの「知的直観」または「直観的悟性」の働きのなかにみる．「もしも直観的悟性というものがありうるならば，それによって全体は一挙に与えられ，アポリアは少なからず解決されるだろう[(3)]」．もちろん，循環を単純な思い込みでたちきるというのではない．解釈学的循環自体がもつ認識に対する積極的役割が，その都度全体を総合する知的直観や直観的悟性を想定することで，ハイデガー，ガーダマーの場合とは異なる仕方でだが，明らかになる可能性が示されているのである．「近代の自然科学者が後生大事にしている論証的悟性とは区別される直観的悟性は，この「至高の理性」に属している．そして実はこのようなゲーテ的な認識論は，ディルタイ—および後述するフッサール—が多かれ少なかれ共有していたものでもあった．直観的悟性が秘教的であるにしてもないにしても，ディルタイの解釈学は，すべての人々がこのような至高の認識に目覚めることを要求する啓蒙的な性格を秘めているのである[(4)]」

ディルタイ解釈学の形態学的傾向を積極的に肯定するこの高橋の論文は，ディルタイの理解概念の潜在的豊かさを示すうえで一つの方向を示しているといえよう．だが，知的直観にせよ直観的悟性にせよ，論証的悟性による認識とは区別されるといわれてはいるものの，いまひとつその働きや内容が明確でないという不満が残る．本論文ではこの問題を次の点に特に留意しながら考察していきたい．

ディルタイにとって理解とは常に人間的生に関する理解であったわけだ

が，その生は深い次元において「音楽的」とも呼べるような性格をもつと考えられていた(拙稿)[5]．とすると，ディルタイの理解論は言語表現の理解をモデルにしているだけでなく，生の「音楽性」がよく表現されているといわれる純粋器楽音楽の理解もモデルにしている可能性がある．もしそうだとすれば（そして事実そうだ考えられるのであるが），さらに形態学的見方とこの音楽的理解の関係がどう考えられるべきか，という問題が生じる．というのも，この両者とも概念的言語の理解や悟性的思考のレベルをふまえつつもそれらをこえたところで働くという親近性があるからである．そして，この関係が解明されれば論証的悟性による認識と区別されうる理解のある根本的な特徴がさらに明確化されてくると思われるのだ．

2．ゲーテ形態学にみられる比較的・類比的思考

ディルタイはバーゼル大学就任公開講義（1867）で，1770年から1800年にかけてのドイツにおける文学的哲学的運動を概観し，レッシングの後に続きヘーゲル，シュライエルマッハーらに先立つ第二世代の代表者としてゲーテを論じ，全体から部分へ進む「知的直観」を駆使したゲーテの自然の発生学の最終目標をつぎのように解説している．

「しかし彼（ゲーテ）は自らの計画の終結を，ただ人間の比較科学のうちにだけ見出だすことができた．こうした科学を彼は目ざしていたのだ．……しかもこの課題の解決のためには協働する諸科学の包括的な計画が企図されねばならない．……この計画の一部は，リッターやアレキサンダー・フォン・フンボルトの不朽の著作のうちで実現されているように思われる．しかし他の部分に関しては，私達自身がその計画の最初の準備作業の只中に立っているにすぎない．このようにゲーテの探求のまなざしは，やはりまだ今日私達がなしていることに向けられているのである[6]」

因果関係を追求する説明科学ではなく自然界の個々の現象や形態の成立条件の記述つまり「なぜ（Warum）」ではなく「どのように（Wie）」を解

明しようとするゲーテ自然学は，「人間の比較科学」に至る射程をもつこと，そしてそれは実際にはヘルダー，リッター，フンボルト，歴史学派によって人間的世界に導入され，自分たちもこの流れのうちにいるのだという現状認識をここでディルタイは行っている．自然科学的方法に影響を受けた要素主義的・分析的な実証主義にもヘーゲル的形而上学にも組みせず，「経験主義ではなく，経験」に根差した思惟を追求していた彼にとって，自然哲学にも自然科学的合理主義にもやはり満足できず独自な学問の可能性を追求したゲーテの試みに自らの課題を重ね合わせたことは当然といえば当然といえる．歴史的社会的世界を把握可能にする条件の吟味という超越論的問題設定すなわち歴史的理性批判の試み自体はもちろんカント的であるのだが，その思惟自体の内容に関してはゲーテの影響が実に大きいといえよう．ディルタイの理解問題に入る前に，まず，このゲーテ自然学，とくに形態学が捉えた「自然」およびその方法論・認識論について概観しておきたい．

a．ゲーテ形態学のメタモルフォーゼ論および原型論

ゲーテ自然学の対象は，植物，動物，岩石，気象，色彩，音響など広範にわたるものであった．しかし，通常，形態学と色彩論が二大支柱とされている．19世紀末から20世紀にかけて今日みるかたちに分化，成立してきた自然科学の立場からすると，このゲーテ自然学はディレッタントによる疑似科学とみなされ，とくにニュートン光学に真っ向から挑んだ色彩論の評判は芳しくなかったものである．だが，20世紀も後半になると，ハイゼンベルク，ハイトラー，ヴァイツゼッカーなどの物理学者やフランクフルト学派に属するアルフレット・シュミットらによる再評価の気運が高まってくる[(7)]．ここで詳述する余裕はないが，ニュートン，ガリレオ以来自然科学に内在し続けてきた操作主義的発想，すなわち自然を対象化し支配しその富を徹底して搾取しようとする発想や，そうした発想を成り立たしめている道具的理性優位の状況への反省ないし危機感が再評価の背景に存する

といえよう．当然ながら，この自然学の自然観は近代自然科学のそれとかなり違っている．よく指摘されるように，「世界霊」の流出によって自然も生じたとする新プラトン主義的自然観やスピノザ的な汎神論的自然観がそこにみられる．神性が自然の細部まで浸透しており，自然は単なる死せる物質の集合ではなく，絶えず創造と破壊を繰り返す生きた活動する力すなわち「能産的自然 Natura Naturans」（スピノザ）として体験され表象されているのであり，また，自然の多様さの中に同一性が信じられているのである．こうした自然観を背景に，同一性の究明が原型論として，様々な条件のもと多様化してくる過程の考察がメタモルフォーゼ論として展開されることになる．もちろんこの二つは分かち難く結びついて形態学を構成している．まず後者の特徴からみていきたい．

自然を動的形成過程すなわちメタモルフォーゼの過程にあるものと捉える以上その原動力が問題となる．ゲーテはそれを分極性 Polarität と高昇 Steigerung と呼ぶエレメントにみている．分極性とは相反する二つの両極，たとえば，磁性のプラス—マイナス，有機体の弛緩 Diastole —収縮 Systole，呼気—吸気，分離—統一などをいい，それら両極間の往還過程それ自身もさすタームである．高昇とは，こうした過程を経ながらより高い様態へと存在が変化していくことをいう．たとえば植物の例でいえば，子葉の状態からその組織の拡大と収縮の過程を繰り返すことで，茎，花，実へと高昇，メタモルフォーゼしてゆく，といわれるのである．また別な種類の植物との間にもメタモルフォーゼによる移行関係が想定されている．他の領域でも，色彩の生成過程には光—闇の，音楽もしくは音響現象には長調—短調の，大気現象には重力の増—減や気圧の上昇下降の対立や移行をみており，換言すれば，自然をリズミックな形成過程とみなす傾向がこのメタモルフォーゼ論の特徴といえるだろう．

原型論的発想の方はどうだろうか．この発想によれば，一見多様に見える自然界の植物や動物の形態は，ある一つの原型すなわち「原植物 Urpf-

lanz」や「原動物 Urtier」からメタモルフォーゼしてできたヴァリエーションとされ，また，現象に関しても個々の現象のプロトタイプとなるような「根本現象」が存在しており，それらを直観することが自然学の目的とされている．ただ注意しなければならないのは，原型にせよ，根本現象にせよ，形態や現象のある一面を抽象，代表して作られた単なる概念ではないという点である．彼によれば，その中に多様なものが直観され，「あらゆる事例を包括しているから象徴的でありあらゆる事例と同一的」[8]な，しかも感性的な認識可能性も期待されている理念，形相的本質である．多様なものの中に同一的なものをみ，しかも多様さを失わない形で直観しようとするゲーテの原型論的認識態度は，だから，多様性を同一性へと還元し差異を切り捨ててしまたタイプの類型論と単純に同一視されてはならない．さきのメタモルフォーゼ論の特徴をも考慮し，たとえていえば，ゲーテは自然をひとつの主題に基づく変奏曲としてポリフォニックに厚みをもって捉らえようとしているのだ．

b．ゲーテ形態学の認識論的・方法論的特徴

さて，このようにゲーテ形態学の特徴をあげてみると以下の興味深い点に気づく．まず，いずれの場合も音楽的比喩が適切だということ．繊細な自然観察，卓抜なデッサン，自己証言などからゲーテは「目の天才」と呼ばれることが多く，それに比べると音楽との関係が本質的な問題として取り上げられることは概して多いとはいえない．だが，シュトラースブルクのゴシック大寺院を「神の樹木」と呼び，そこに「至福のメロディー」や「主和音」を聞き取ったり[9]，建築を「凝固した音楽」と呼んだシェリングに倣って「鳴りやんだ音楽」と語り，オルフェウスが竪琴の楽の音によって町を建設したという古代ギリシアの神話を引きあいにだし次のように語ってもいるのである．「楽の音は消える．だがハーモニーは残る．この町の市民達は永遠のメロディーのあいだを歩き回る．……目が耳の機能や職分や義務を引き受け，きわめてありふれた日常にあっても市民も，自分達

が理念的状態にあることを感ずるのだ」[10]．芦津丈夫も指摘するように，自然認識に限らず世界経験そのものが「音楽的」とも呼べるものであったようである[11]．確かにゲーテの主要な認識器官は「目」ではあった．しかしそれは，視覚というとかならず想定される対象化，客観化の働きだけをうけもっていたのではない．この引用にもあるように「耳の機能」までも引き受けていたのである．「目」を介して世界を「音楽的」に経験していた，このゲーテの存在の構えは，当然詩作に関しても，ディルタイが指摘するように明瞭に現れている．「彼の心には，ある音楽的力がこもっていて，それが世界の一つ一つの印象に，ある音形象を以て答える[12]」．

ところで，以上の自然認識は近代自然科学のそれとかなり異なっている．ゲーテ自身もこのことを十分意識しており，特に方法論に関して違いを強調している．その最も大きな違いは，近代科学が実験を重視し帰納法によって事象の法則的な因果関係をつきとめることを目標にするのに対し，ゲーテ自然学は人間こそ最も精密な科学計測機器だと考え，全体的文脈の中でこそその真の意味を開示する現象をその文脈から引き離して人工的環境のなかで条件を統制し，仮説検証を行おうとするタイプの実験がもつ一面性，強引さを批判，自然研究者に「対象とぴったり一致し，それによって本来の理論となる繊細な経験[13]」（すなわち「対象的思惟」の遂行）を要求する点にある．そして，そのために比較法に基づく類比（アナロジー）的思考が重視される．近代合理主義において（たとえば，ホッブスやロック），不確実だという理由により否定的に考えられがちだった類比をゲーテは類型論の方法として積極的に肯定するのである．「類比によって考えるのは非難さるべきでない．類比には，議論を打ち切らず，本来，最後的なものを求めないという長所がある．それに対して帰納法は，立てた目的にばかり目をそそいでがむしゃらに突き進み，まちがいも真実もいっしょにひきずっていくから，危険である[14]」．多様な形態のなかに差異も保持したまま原型をえがきだす認識方法としての類比が，共通性のみ

を引き出し差異を偶然的なものとして排除してしまうという，すでにベーコンも（肯定的な意味でだが）指摘していた性質をもつ帰納法に対置されている．この対立を思考形式の観点からみると，どちらかといえば全体から個へ進む直観的思惟である前者と個から全体へ進む分析的思考である後者の対立といえる．また後者を表様形式の観点からみると，類比による原型の提示は，隠喩表現と同様な性格をもつといえる．というのは隠喩表現とは，たとえられているものとたとえの間の類似性を基礎に，その両者のもとの意味が一方に解消されることなく同時にポリフォニックに差異を保持したまま響きあうときその魅力と効果が斬新に発揮される比喩表現であり，様々な形態を重ね合わせそれらの中に原型を直観する比較的類比的思考と同じ構造をもっていると考えられるからである．また，比較的類比的思考と隠喩表現と共通する能力を換言すると，音楽表現を聴取する際の能力ともいえるだろう．すでに「ポリフォニック」という表現を使用したが，これは浅い比喩ではない．和音や進行している幾つかのメロディーラインを同時に把握する能力が，多様な形態や多層な意味を全体的に把握する類比的思考や隠喩表現と，たとえこれらの媒体が音ではなく視覚的形象や言葉だという違いがあるにしても，意味発生の仕方に関して，近しい関係にあるのだ．ここで，先に問題にしたゲーテの世界経験を成り立たさせていた重要な条件である「音楽的力」や「耳の機能」が何を意味していたのかが明らかになる．すなわちそれらは，詩作においては象徴，すなわち，隠喩表現として現われ，形態学のレベルにおいては比較法に基づく類比的思考として現われる，分析的悟性と区別されうる思考様式のことである．多くの論者が指摘するように，ゲーテの自然と芸術に対する態度はこの点で一致しているといえよう．

3. ディルタイの理解概念にみられる形態学的特性

a. 理解の過程

では，具体的にディルタイ哲学のどこにこうしたゲーテ自然学の影響が見出だされるのであろうか．先にも述べたように，まず明瞭に現れているのは中期の記述的心理学と後期の世界観学である．前者は心的生の構造連関すなわち原型とそこで展開されている心的過程，たとえば形象のメタモルフォーゼの過程の記述を，後者では多様な世界観に共通する構造，代表的な類型（自然主義，自由の観念論，客観的観念論）の呈示，および現実にみられる様々な世界観の存在をそれら類型のメタモルフォーゼの結果とみなす説明などを行っている．一方は心理というミクロな世界を他方は社会的歴史的世界というマクロなレベルを問題にしているが，ミッシュやローディもすでに指摘していたように，これらの考察はいずれも原型論とメタモルフォーゼ論という形態学的思考の特徴を顕著に示している．方法論の観点からみても，類比推理と比較法を採用しており，明らかにゲーテ自然学の影響のもとにあるといえる．しかし，先にも述べたようにゲーテの影響力はこれにとどまるものではない．形態学的思考と対称的な役割が期待されることの多い解釈学の中心概念である理解にも形態学的と呼べる性格が存すると思われるのだ．

ところで，我々は歴史的社会的世界の様々なレベルで現実を認識し価値を感じたり樹立したり目標を立てたりしつつ行動し，世界と相互交流しながら生きている．こうした目的論的活動を「作用連関 Wirkungszusammenhang」とディルタイは呼び，我々個人はそれら多様に織り成す作用連関の結節点と考えられていた．そしてこうした生が直接我々に与えられた意義深い事態を「体験 Erlebnis」呼ぶ．体験は様々な形で常に表現され，さらに理解を通じてその意義が明確に確立される．その表現が行為や表情といった身体表現であれ，礼儀作法といった慣習であれ，数学的記号

表現であれ，音楽による表現であれ，色彩とフォルムによる表現であれ，そして言語表現であれ，そこに発生する意義連関を把握する理解を通じて初めて生の本質が開示されるのである．それはまた，日常の場面においても時間的空間的に疎遠な表現の場合にも生じる，換言すれば，精神科学の全ての作業の基礎に見出される認識様式なのである．（前者は「基本的理解」，後者は「高次の理解」と呼ばれる）それゆえ，この理解過程の認識論的・論理的・方法論的諸条件を解明する解釈学が精神科学の基礎づけのために重要となるのである．

ディルタイは理解行為に共通する構造を取り出すために，以下の二つの観点からその特徴を述べている[15]．まず，認識論的条件を考察し（これは同時に解釈学のアポリアでもあるのだが），「他性」を帯びた表現が理解可能となる根拠に関し，目的論的性格をもつ心的生の構造の同一性および歴史的社会的世界の地平内で成立している自己と他者の間主観的「共通性」をあげている．理解の進行過程に関しては，個から全体へ，全体から個へと進まざるをえない本性，いわゆる解釈学的循環の存在を指摘する．また，理解には説明が必要であるし，説明には必ず理解が前提とされている，という循環も理解行為の成立条件としてくわえている．

一方，論理的・方法論的観点からも検討し，この過程のなかに類比推理・帰納推理・類型または一般的知識の適用・比較といった基本的論理操作を指摘する．たとえば，『ゲーテと詩的想像力』におけるゲーテ理解の試みにこの実践が明瞭にみてとれるだろう．ここでディルタイはゲーテに特有な想像力の働きを解明する前に，まず，心的生内での感情などの影響による記憶像や表象や形象のメタモルフォーゼすなわち想像力の一般的な過程を述べる（類型の呈示）．しかるのち，それを枠組みとしながら（その適用），ゲーテの文学上の個々の作品や自然学関係の個々の叙述から共通して見出だされる想像力のありかたを音楽的言語想像力，視覚的想像力として取り出し（帰納推理，類比推理），つぎにシェイクスピア，ルソーと

比較することでゲーテの個別性を浮き彫りにすることを試みている（比較法）．そして再び最後に以上を総括する形でゲーテの詩的想像力に言及する．この叙述形式は明らかに上述の理解の論理的・方法論的過程をふんでなされているわけである．

ところで以上二つの観点からする理解の特徴づけとともに，ディルタイはさらに心理主義的と批判されても仕方がないような説明をつけくわえている．評判の悪い「理解＝追体験」論である．作者の現実の体験そのものではないが，そこに表現されている「理想的な」体験連関を追体験することが理解行為にみられるといわれるのである．理解の認識論的・論理的・方法論的な様態の記述だけで十分であると思われるのに，なぜ，誤解をまねきやすく理解論を不統一なものにしてしまうおそれがある，こうした「心理主義的」説明をつけくわえるのだろうか．すでにディルタイは表現の理解とは作者の心理内容の理解ではなく表現の意義の理解であると言明しているにもかかわらずである．リクールやガダマーらがいうように結局のところディルタイの理解論は言語性にナイーブな対話モデルの心理主義的理解論にとどまるのであろうか？　ディルタイはつぎのようにのべている．「また，理解は単純に思考の機能と考えられるべきではないということもすでに述べたところである．すなわち，置き換え，追構成，追体験，これらの事実はこの様に理解していく過程に働く心的生の全体を示していた」[16]．理解という行為は論理的諸操作で言い尽くされるものではなく心的生全体が働く行為であることを強調したいのである．しかしそれにしても，リクールらの批判もふくめてこうした疑問に答えるためには，このディルタイの説明では不十分だろう．心的生が全体として働くといわれる「追―体験 Nach-erleben としての理解」の，より詳細な様態がわからないからである．そこで以下では，理解における意義発生の仕方の検討を通じてこの問題にアプローチしてみたい．形態学的性格もその時同時に明らかになると思われる．

b．意義のポリフォニックな把握としての理解

理解の対象を心理内容ではなく表現された意義 Bedeutung，およびそれら意義の連関から生じてくる全体的意味 Sinn であると定式化した際，これらのカテゴリーを術語化するため，ディルタイは想起 Erinnerung の中で現われてくる体験連関の意義―意味関係を言語表現において現われてくる意義―意味関係，音楽表現に生じる意義―意味関係と比較しながらつぎのように語っている．

「様々な言葉が何かを示す意義をもち，また文が我々が構成する意味をもつように，生のさまざまな部分の規定されていると同時に規定されていない意義から生の連関が構成される[17]」．

「そして諸体験は，交響曲のアンダンテにおいて動機が現われる場合のように振舞うのである．諸体験は展開され (Explikation) そしてその展開されたものは纏められる (Implikation)．音楽はこの点でひとつの豊かな体験の形式を語っている[18]」．

想起という行為の中で個々の体験のそれぞれの意義というベクトルが確立され方向性が生じ，それまでの人生の全体的な意味が生起する．また逆に意味が生じることで個々の意義が更に明瞭になるというこの体験連関における意義―意味の発生の仕方を言語表現と音楽表現の理解を例にとって明確化しようとしているのだが，どちらかというと言語表現の意義―意味の発生の仕方よりも音楽表現のそれとの類似性のほうをディルタイは強調する．「人生の様々な部分における内面の表現は何か言語記号とは違うものである」といわれ，それは「本質的に文法的関連とは異なる[19]」からだとされているのである．

では言語表現の理解において生じる意義―意味関係と音楽表現におけるそれとの違いはどの点にあるのだろうか．この問題は必ずしもディルタイにおいて主題的に扱われているわけではない．ディルタイはやはり哲学の「言語論的転回」以前の哲学者であり，認識における言語の問題にナイー

ブな面があることは否めないのだ．だが，生の表現としての言語表現と音楽表現の違いは意識されており，この対比のなかで後者に前者を越えた生の表現力をみていることもまた事実である．拙稿でも論じたように[20]，その際の最大の焦点は言語のディスクールジフ性にあると考えてよさそうである．この場合のディスクールジフ性とはミッシュがディルタイを継承発展し「解釈学的論理学」を試みた際使用した術語である[21]．ミッシュによれば言述の構造は二つの方向にわけて考察されるという．語と文の関係のいわば水平的方向と，語の音声的側面・意義の側面・そこで志向されている対象の三者のいわば垂直的方向の二つである．ソシュール言語学の統合 Syntagme と連合 Association にそれぞれ相当するといえよう．そしてこうした分節構造をもちながら展開する語りや文の性格をミッシュは「ディスクールジフ性 Diskursivität」と呼ぶ．ボルノーによればこの言葉の意味は，伝統的論理学で使われる「論証的思考」の狭い意味だけではなしに「継起的—継続的 Nacheinander-Durchlaufend」の意味でも受け取らねばならないという．換言すれば言述の線状的な展開を指す術語なのである．個々の具体的な言語表現がこうした条件下にある以上，当然のことだが，意義—意味発生の仕方もこの条件に制約され線状的，モノフォニックとならざるをえない．これに対して音楽表現の場合，事情は少々異なり，和音・ポリフォニー・ポリリズムといったかたちで意義—意味関係を同時に多層的に呈示することも可能であり，またそのように理解することが言語表現の場合に比してより強く求められることになる．ここに言語表現と音楽表現の差異が存在する．もちろんこの区別は理念的なものであり，現実的にはその間に様々な移行形態がみいだせるだろう．たとえば，抒情詩などの詩的言語表現の場合，韻律や隠喩をはじめとする比喩表現によりポリフォニックな意義—意味の呈示が可能であり，言語を媒体としてはいるが音楽表現により近い性格をもつといってよいだろう．ボードレールやヘルダーリン，ゲーテの詩的実践に「音楽的天才」をみようとするディルタ

イの態度も，それゆえ，領けるのである．

想起における諸諸体験の意義連関の様態を音楽表現の理解の際に生じる意義連関の様態に比して考えていることは，拙稿で論じたようにディルタイが生の深い次元を音楽的性格をもつものと考えていたことと対応する．ディルタイは『体験と創作』のなかでゲーテとヘルダーリンの詩作の特徴をつぎのように述べている．

「彼（ヘルダーリン）は我々の感情の流れの微かなリズムを聞き取ることができた．最初の感情の状態が幾つもの部分において展開し，結局は元に戻るが，しかしこの時はもはや最初の不確定な状態ではなくて経過の想起のなかで纏められ各部分が響き合って一つの和音を成しているのである」．（ヘルダーリン論文）[22]

「ゲーテは心的生の統一を，固定した特徴においてではなく，その生の諸契機をいわば現存在の旋律へとむすびつけるある内的法則において現し示す」．（ゲーテ論文）[23]

過去の全ての，とまでいわないまでも，少なくともその幾つかが，一つの体験や意味に置き換えられたり還元されたりせず，互いにそれぞれの意義を交響させ一つの「和音」を生み出す，といった具合に体験連関すなわち生を捉えることがおそらくディルタイの求めていたものであり，「理解＝追体験」論は音楽表現の理解をモデルにしていると考えられる．言語表現を対象とした場合でも，そこで表現されている生自体がこうした性格をもっている以上，心的生が全体として働き，個々の語や文の意義連関を多層的に把握する仕方が求められる．それだからこそ「理解が言葉とその意味の範囲を越え，記号の意味ではなく生の現れの遙かに深い意味を求めるやいなや，追創造や追体験が一般的方法となる．それはフィヒテがはじめて気づいた方法である．生は旋律のようである．旋律のなかで，音は生にある現実的実在の表現として現れるのではない．生そのもののなかにその旋律があるのだ」といわれるのである．[24] または，シェイクスピアの叙事詩

的演劇の理解の過程にふれ次のように語っている.

「しかし劇詩の音楽的要素は，そのなかの叙情的な人物に由来する内面的音楽から生じるだけでなく，観客のなかで生じる全体として纏まったものの効果からも出てくる．劇が進むにつれて，各人物の生感情や特色の様々な対比が次々と効果をあらわし，観客の記憶のなかでこの多様さが不協和音および協和音として纏められ，こうしていわば多くの音列が錯綜して響き，そのための豊かさの感情，混合した生の性格の感情が成立する[25]」.

追一体験としてのこの理解過程のなかにあっても，先に述べた生の機能としての基本的論理操作が働いていることには変わらない．類比推理・帰納推理は同一性や類似性の把握を，比較は差異や個別性をうきだたせる機能をになっている．それらを通して定立される類型の適用による認識法にしても，ゲーテの原型論の場合と同様，閉鎖的解釈を用意するものではなく，同一性や共通性や一般性を把握しつつ同時に差異や個別性も解消せず同時に重層的に捉えようとする行為なのだ．類型はディルタイ自身も何度も強調しているようにあくまでも認識の補助手段なのであり，類型の適用が同時に新しい類型への再編過程でもあるような動的な性格をもつのである．また個一全体の解釈学的循環にしても，意義の不確定さという欠点よりも多義的な意義様態の豊かさの保持という積極性をみなければならない．理解とはこうした過程を通して表現の意義のポリフォニックな把握を試みる行為であり，音楽表現とくに器楽音楽の理解に理想的な形でみられるものなのである．であるから，「理解＝追体験論」を単純に心理主義的ということはできない．たとえ理解が感情や意志の調子を変化させることだといわれることはあるにせよ，そこで問題にされているのは動的な意義発生の仕方とその把握法という問題なのであって，表現の背後のオリジナルな心理内容や作者との一体化が問題とされているのではないからである．また，言語とくに文字言語表現の理解構造にナイーブな面が確かにあ

るにせよ，言語表現とその理解に還元されない生の営みとしての表現行為や理解の深い次元をみていたことも忘れてはならないだろう．

こうしてみると，ディルタイの理解はゲーテ自然学の比較的・類比思考と近い関係にあるといえよう．ゲーテの場合も先に検討したように，自然界の多様な形態や個々の現象のなかにそれらを貫く類似性を探りだし，それぞれの特殊性が解消されず交響するような仕方で保持される原型や根本現象の把握が目指されていた．ディルタイ自身は理解概念に関しゲーテの影響を直接的には示唆してはいないが，認識論的・方法論的特徴をみるとき，そしてまたゲーテの世界体験もディルタイの生概念と同様，音楽的性格をもっていたことを考え合わせるとき，認識論的方法論的観点からは比較法的かつ類比的，表現の観点からは隠喩的，理想的モデルの例でいえば音楽的としてあらわれる，表現の意義の動的かつポリフォニックな把握という「追—体験 Nach-erleben としての理解」のこの側面は，形態学的性格と呼ばれてもよいと思われる．先の引用にあったようにマクロ的にみても，精神科学の構想を「人間の比較科学」の延長線上においていること自体，その基礎づけの要である理解論に形態学的見方の影響があることを暗に示しているといえよう．

3. 結　　び

これまで論じてきたことは，結局のところ，思考の二つの様式の問題に収斂してくると思われる．1830年フランス学士院でなされた比較解剖学上の議論についてのゲーテのコメントがこの問題をかなりはっきりと示している．この議論とは，動物の分類法に関して，四つの類型（脊椎動物，軟体類，関節類，放射類）を主張するキュヴィエと全動物に共通する唯一の原型だけを主張するジョフロワ・ド・サンティレールのあいだでなされた議論のことだが，ゲーテによれば特殊比較解剖学上の問題を越え，思考一般に係わる問題を提起しているという．前者は「生物の識別と，対象の正

確な記述という道を辛抱強く歩みつづけ」「個から全体へ進む」タイプの思考の体現者であり，「終始具体的なものにたずさわり，その手掛けた仕事を証明することができるし，常識の枠を踏み外すこともなければ，逆説的な言葉をはくこともない」．それに対して後者は「理念から出発する人」であり「経験を次々と従えてしまうような根本概念を摑むこと」を目ざし「生物の類似とその秘められた親近関係を求め」「全体を内的感覚で捉らえ，個は全体から次第に展開されるものである」と考えるタイプの思考の体現者である[26]．つまり，この議論は，近代合理主義の正統的立場に立ち帰納法的研究を尊重する論証的悟性・分析的思考と，あらゆる存在の同一性を確信し総合的比較法的研究を重視する知的直観的類比的思考の対立なのである．ゲーテ自然学は明らかに後者に立つものでゲーテ自身も後者への親近感を隠そうとはしない．だがこの二つの傾向が分離と結合という生命活動に根差しているもので根深いものである以上，互いが相補的役割を演じていることもまた事実であり，相方の協力が知の発展にとって不可欠だと主張する．「この機会に我々一人一人が，分離と結合は分かちがたい二つの生命活動であるといってくれればいいのだが．あるいはこういったほうがよいかもしれない．すなわち，好むと好まざるとにかかわらず，全体から個へ，個へか全体へと移行することは不可欠であり，呼気と吸気のように互いに補いあう精神のこの機能がより生き生きと働けば働くほど，学問も学問の友もより多くの恩恵に浴するであろう，と」[27]．

二つの思考様式が「生命活動」にまで根差す対立だというこの部分で，ソシュール，ヤコブソン，レヴィ・ストロースの流れで展開された構造主義的思考観が思い起こされる．周知のように，ヤコブソンはソシュール言語学を拡大継承し人間のシンボル活動，精神機能を言語構造および比喩の形式の分析から換喩（統合）機能と隠喩（連合）機能の二つに分類した．前者はシンタックスのもと展開するディスクールの顕在的流れを可能にする能力であり，比喩表現では換喩として現われる事象の隣接関係を通時的に把

握したり表現したりする精神機能である．後者はディスクールに顕在的に現われないが記憶のなかで音声的・意味的に類似な語の集合を可能にしている能力であり，比喩表現では隠喩として現われる，事象の類似関係を共時的に把握したり表現したりする精神機能である．ゲーテの場合は生の分極性に，ヤコブソンらは言語構造にと考察の背景は異なるが，以上のゲーテの考えと実に多くの共通点をもっている．前者は分離とリニアーな展開を示す論証的・分析的思考に，後者が結合とヴァーティカルな様相をみせる類比的思考に相当するのである．ヤコブソンの発想を拡大したレヴィ・ストロースは，近代科学に対する「野生の思考」を「具体の科学」として後者に教え，ゲーテ自然学との親近性を指摘している．また，近代以降こうした思考が生き残っている領域としてブリコラージュや芸術，とりわけ音楽を挙げている．この詳しい検討はここでは不可能だが，これまでの考察の流れの上からも大変興味深い指摘である．いずれにせよ，こうしたタイプの「科学」は，多様な形態や意味をそれらに通底している類似性に基づいて多層的に把握しようとする類比的・隠喩的思考法を特徴としており，因果関係のリニアーな説明的解明，対象の「操作」や「効率」という点では劣るが，探求の対象や探求者自身の生きている世界における位置を豊かに呈示してくれるという点で勝っている．また，河本英夫によれば，正統的自然科学においても，新しい理論が形成される際，発見原理として重要な役割を演じもするという[28]．忘れてならないのは，ゲーテ，ヤコブソンらが強調していたように，この二つの思考は相補的であって，どちらが強調されるかのちがいはあるにせよ，どの精神活動においても両方がかならず同時に働いているという点である．自然科学には論証的・分析的思考，換喩—統合機能だけが，芸術や精神科学では類比的・総合的思考，隠喩—連合機能だけが働くということではないのである．

さて，ゲーテの形態学的思考が究極的に論証的分析的思考と区別されるもうひとつの思考の可能性を示唆していたことを考慮しつつ，ゲーテとい

う補助線をディルタイの歴史的理性批判に引いてみると，自然科学的認識の可能条件を分析をしたカントの「純粋理性批判」に対抗してなされたこの試みは，ポリフォニックな意義把握を司どる比較的・類比的・隠喩的・音楽的思考の可能条件の吟味を企図したもの，という側面が浮かび上がってくるようにみえる．

もちろん歴史的認識は理解のこうした機能だけで生じるわけではない．それどころか，こうした形態学的側面が強くですぎてしまうと，ディルタイがゲーテの歴史認識を批判して述べたように「歴史的過程に直線または螺旋をなしてのぼったりくだったり，進んだり退いたりすること」しかみず，[29] 歴史的道程の必然的展開を認めることができなくなってしまう．歴史的認識の可能条件の考察には，さらに様々な理解の側面たとえば体系的精神科学(政治学，経済学，社会学，言語学 etc.)による一般的知識との関係や理解の客観性の条件の検討，といった点からする解明が必要である．換言すれば，論証的・分析的思考との関係や解釈学的諸問題との関係のなかで理解が扱われねばならない．しかし，ここでは先に述べたように，ゲーテ自然学を仲立ちとし，意義発生の仕方からみて明らかになる理解の潜在的可能性すなわち形態学的性格を強調することに論を意識的に制限した．そうすることでこれまでのディルタイ解釈の一面性を際立たせ，生に深く根差した以上の二つの思考様式が問題とされるより広い地平にディルタイの理解概念を位置づけ，その潜在的射程範囲を素描してみたかったからである．ここではこの問題の枠組みを提示しただけで終えざるをえないが，一方の極に自然科学に純粋に現れる論証的分析的思考を，もう一方の極に音楽をはじめとする芸術や神話などに純粋に現われる類比的隠喩的思考をおくとすると，精神科学にあらわれる理解をどこにどのように位置づけるべきなのか(もちろん後者に近いほうなのではあるが)，それが明確にされて初めてディルタイの理解の深い把握が可能になると思われるのである．そしてこの問題が，ディルタイの生の哲学を最もよく継承したとされるゲ

ッチンゲン学派のミッシュが，先にもふれた『解釈学的論理学』の講義でとりあげた問題でもあったことを考え合わせるとき，この方向でのディルタイ解釈学の研究がいかに重要であるかが痛感されるのである．

註

(1) Frithjof Rodi, Morphologie und Hermeneutik, W. Kohlhammer/Stuttgart, 1969, S. 47f.

(2) 高橋義人 『ディルタイ解釈学の形態学的視座』(『思想 1984 2月号』岩波書店，所収)

(3) 同 p. 42.

(4) 同 p. 44.

(5) 真壁宏幹 『後期ディルタイにおける「生そのもの」の概念』(『ディルタイ研究2号，1988，日本ディルタイ協会，所収)

(6) Willhelm Dilthey, Die Philosophie des Lebens, V. Klosterman/Frankjurt am Main, S. 20-21.

(7) たとえばハイゼンベルクは『自然科学的世界像』(みすず書房) のなかでゲーテの色彩論を比較し，ゲーテ自然学の再検討を試みている．また，アルフレット・シュミットに関しては Alfred Schmidt, Goethes herrlich leuchtende Natur, C. Hanser/München, 1984, とくに S. 14f. を参照.

(8) Johann Wolfgang Goethe, Goethe Werke Bd. 12 (Hamburger Ausgabe), C. H. Beck/München, 1973, S. 366 なお邦訳の『ゲーテ全集13，14』(潮出版) も参考にした.

(9) a. a. o., S. 7f.

(10) a. a. o., S. 474.

(11) 芦津丈夫 『ゲーテの自然体験』(リブロポート) p. 189以下

(12) W. Dilthey, Das Erlebnis und die Dichtung, Vandenhoeck & Ruprecht/Güttingen, 1985, S. 183 (以下，E. D. と略記)

(13) J. W. Goethe, a. a. o., S. 435.

(14) a. a. o., S. 368.

(15) W. Dilthey, GESAMMELTE SCHRIFTEN V. B. G. Teubner/Stuttgart, (以下，全集からの引用は巻数と頁数のみ記す)

(16) W. Dilthey, G. S. VII. S. 218.

(17) a. a. o., S. 233.

(18) W. Dilthey, G. S. VI. S. 316.

(19) W. Dilthey, G. S. VII. S. 235.

(20) 真壁. 前掲論文

(21) ミッシュはゲッチンゲン大学での『論理学と知の理論』と題された講義のなかでこの試みを行ったのだが，まだ出版されてはいない．ここではボルノーの Studien zur Hermeneutik Bd. II. Alber/Freiburg, München, 1983 の詳しい解説を参考にした.

(22) W. Dilthey, E. D., S. 307.

(23) a. a. o., S. 179.

(24) W. Dilthey, G. S. VII. S. 234.

(25) W. Dilthey, E. D., S. 151.

(26) J. W. Goethe, Goethe Werke Bd. 13, S. 220.

(27) a. a. o., S. 232-233.

(28) 河本英夫 『自然の解釈学』(海鳴社) p. 24以下

(29) W. Dilthey, E. D., S. 164.